



大学入門ゼミ小豆島一日研修(1年次)



ICTを活用した出前授業(2年次生)



※感染症等対策として私語を控えるよう指導の上、集合写真のみ、マスクを外して撮影しています。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.9



教育実践プロ演習(2年次)



教育実習(3・4年次)



21.04.03 入学式の日に。

PICK UP NEWS 2021年度の実地教育が、遠隔授業等で始めました。

本年4月3日、香川大学教育学部は、165名の新1年次生を迎えました。ICTを活用できる教員の養成を目指すと共に、遠隔授業を実施せざるを得ない状況への対応を含め、本年度より本学教育学部でも、入学時のノートPC必携化が始まりました。実地教育関連授業である1年次「大学入門ゼミ」等の科目において、早速、学生1人1台のノートPCを活用した授業を始めました。教員が提示する資料を手元のノートPC画面上で確認したり、授業の進行に応じてチャットに反応を書き込んだりする学生の姿が見られました。

4月15日には3年次主免生への教育実習全体事前指導が始まりました。昨年度はオンライン授業が中心であったため、学生への何かしらの影響を懸念していましたが、元気に、熱心に指導を受ける学生の様子に安心しました。

香川大学では、新型コロナウイルス感染症への対応として、間隔を空けて着席させ、手指の消毒や換気を徹底した上で対面授業を続けていましたが、5月の大型連休以降、県内の感染状況をふまえ、遠隔授業に切り替えて実施せざるを得なくなりました。本年度の教育実習を中心とする実地教育がどのように実施できるのか不透明なところもありますが、学生たちが安心して深い学びができることを願いつつ、教育実習に向かう心構えや基礎基本をしっかりと確認し、実習校園へ送り出すことができるよう、努めてまいります。

センター長あいさつ／令和2年度 センター日誌／令和3年度 附属教職支援開発センター 事業計画	2
[特集] 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動	3
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 研究グループ報告	3～6
令和2年度 教育実践集中講座 実践報告／着任のごあいさつ	7
令和2年度 センター公開講演会 報告	8
令和2年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告	8
附属学校園 この1年～2020～	9～12
教育実践総合研究(第44・45号) 原稿募集	12

センター長 あいさつ

関係各位におかれましては、お忙しい毎日をお過ごしのことと拝察いたします。日頃より本センターの事業にご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年からのコロナ禍の影響は少なからぬものがあります。香川大学でも、授業等の多くがオンラインへと移行しました。演習・実習・実験などの一部も、形態の変更を余儀なくされた等、様々な影響を受けてきました。本稿執筆時点でも、予断を許さない状況が続いています。一日も早い収束を望んでおります。

さて、本センターでは、2019年4月から、①実地教育推進、②教職支援推進、③教員研修推進、④教育開発/ICT推進の4部門で事業を進めております。新設された③教員研修推進部門と、名称変更となった④教育開発/ICT推進部門については、それぞれの事業を進めつつも、コロナ禍の影響もあってまだ模索が続いている状況です。

一方、2022年度から始まる第4期中期目標・中期計画に向けて、学部内外でのセンターの役割についても再度検討が必要となっております。今後センターには何が必要とされているのか、教員養成や教員育成をも含んだ教育

や研究及び事業は、どのように考えればよいのか等が問われており、我々が試される日々は続いております。今後とも附属教職支援開発センターに、ご支援・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。



附属教職支援開発センター長
松村雅文

令和3年度 附属教職支援開発センター 事業計画

1 実地教育推進部門（実地教育に関する管理及び運営）＜実地教育委員長（永尾）、センター＞

- (1) 「大学入門ゼミ」「教職概論」(1年次) <教員養成課程主任(片岡)、松下・清水・笹屋>
- (2) 「教育実践プレ演習」(2年次) <未来留担当(藤元)、松下>
- (3) 「教育実践演習」(事前事後指導)(3年次) <センター長、山岸・久米・豊島・清水>
- (4) 「教職実践演習」(4年次) <実地教育委員長(永尾)、山岸・久米・豊島・笹屋>

2 教職支援推進部門（教職支援に関する管理及び運営）＜学生支援専門委員長(笠)、センター＞

- (1) 教職志望学生への日常的支援活動
<学生支援専門委員長(笠)、宮前(義)・植田・山本(木)・久米・豊島・谷口・片岡・宮前(淳)>
・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教授対応
- (2) 教職志望学生及び現職教員への教育相談活動 <同上>
・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
- (3) 教育実践集中講座の開催 <松下、毛利・櫻井・(客員教授:小山・藤原・岡)>

3 教員研修推進部門（現職教員研修に関する管理及び運営）

＜NITS四国アライアンス香川大学センター長(野崎)、センター＞

- (1) 現職教員への研修支援活動
<NITS四国アライアンス香川大学センター長(野崎)、センター長・山岸・久米・豊島・谷口・柳澤>
・指導力向上のための公開講演会等の開催
・教職大学院現職教員研修への協力
・学内の現職教員研修各種プロジェクト(教員免許状更新講習を含む)への協力

4 教育開発/ICT推進部門（教育開発に関する管理及び運営）

＜附属担当理事(高木)、センター＞

- (1) 教材・資料の収集・管理・活用支援 <松下・センター事務>
・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
- (2) ICT機器の活用支援 <松下・清水・笹屋・センター事務>
- (3) 研究活動の報告等 <研究開発委員長(哇)、センター長・松下・山岸・センター事務>
・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
- (4) 関係機関との連携 <附属担当理事(高木)、センター長・山岸・松下、教育学部総務係>
・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等

5 その他

- (1) 広報活動 <広報委員長(山下)、松下・センター事務>
・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
- (2) 学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導 <山岸・松下>

令和2年度 センター日誌

<前期>

4月21日(火)第一回 専任会議

5月 7日(木)教育実践演習 第一回全体指導
5月13日(水)教特別支援教育実践演習 全体指導
5月14日(木)教育実践演習 第二回全体指導
5月19日(火)第二回 専任会議
5月21日(木)教育実践演習 第三回全体指導
5月28日(木)教育実践演習 第四回全体指導

6月 3日(水)第一回 編集会議
6月16日(火)第三回 専任会議
6月17日(水)第二回 編集会議
6月20日(土)教育実践集中講座(第一期1回目)
6月27日(土)教育実践集中講座(第一期2回目)

7月 6日(月)教育実践集中講座(第一期3回目)
教育実践集中講座(第一期4回目)
第一回 運営委員会
7月 8日(水)教育実践プレ演習 第一回全体授業
7月13日(月)教育実践集中講座(第一期5回目)
教育実践集中講座(第二期6回目)
7月16日(木)教育実践演習 第五回全体指導
7月18日(土)教育実践演習 第六回全体指導
7月20日(月)教育実践集中講座(第一期7回目)
7月21日(火)第四回 専任会議
7月29日(水)教育実践集中講座(第一期8回目)
教育実践プレ演習 第二回全体授業

9月 8日(火)第五回 専任会議
9月11日(金)第95回 国立大学教育実践研究関連センター
協議会(オンライン会議:Zoom)

<後期>

10月20日(火)第六回 専任会議
10月30日(金)教育実践演習 第七回全体指導
教育実践集中講座(第二期1回目)

11月 9日(月)教育実践集中講座(第二期2回目)
教育実践演習 第八回全体指導
教育実践集中講座(第二期3回目)
教育実践集中講座(第二期4回目)
11月11日(水)教育実践集中講座(第二期5回目)
11月16日(月)教育実践集中講座(第二期6回目)
11月17日(火)第七回専任会議
11月19日(木)教育実践集中講座(第二期7回目)
11月26日(木)教育実践集中講座(第二期8回目)
11月30日(月)教育実践集中講座(第二期9回目)

12月 2日(水)第三回 編集会議
12月 3日(木)教育実践集中講座(第二期10回目)
12月11日(金)教育実践集中講座(第二期11回目)
12月14日(月)教育実践集中講座(第二期12回目)
12月15日(火)第八回 専任会議
12月16日(水)教育実践集中講座(第二期13回目)
12月23日(水)第四回 編集会議

1月18日(月)教育実践集中講座(第二期14回目)
1月19日(火)第九回 専任会議

2月 1日(月)教育実践集中講座(第二期15回目)
2月 6日(土)「独立行政法人教職員支援機構連携
教職大学院を対象とする地域センター支援事業」
英語ラボ研修会2020(共催)

2月12日(水)第一回 教職支援推進部門会議
2月16日(火)第十回 専任会議
2月20日(木)第一回 実地教育推進部門会議
2月22日(月)第一回 教員研修推進部門会議
～3月 1日(月) (メール審議)
2月24日(水)第一回 教育開発/ICT推進部門会議
～3月 1日(月) (メール審議)

3月 1日(月)2020年度 学部・附属学校園教員合同研究会
3月 2日(火)第十一回 専任会議
3月 4日(木)第98回 国立大学教育実践研究関連センター
協議会(オンライン会議:Zoom)
3月 5日(金)第二回 運営委員会

※上記の他、実地教育科目(1年次「教職概論」/2年次「教育実践プレ演習」/3年次「教育実践演習(教育実習事前事後指導)」/4年次「教職実践演習」等)のコーディネート・指導を行いました。



学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動

初めてのオンラインでの開催

——第20回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて



元副学部長(学部附属連携担当) 北林 雅洋

新型コロナウイルス感染症対策のために昨年度は中止になりましたが、今年度はオンラインで学部教員と附属学校園教員が繋がって、合同研究集会を開催することができました。初めての試みも、特に総務系の藤澤さんと山田さんのサポートにより、大きなトラブルもなく無事に終えることができました。来年度が第3期中期目標・中期計画期間の最終年度となるこの時期に、これまでの成果を確認し、来年度および第4期に取り組むべきことを考える、良い機会となりました。

なお、今年度も学部・附属学校園教員による共同研究プロジェクトを実施しました。17件の応募があり、4件は学長戦略経費に切り替えていただき、13件について少額ではありますが研究費を配分して共同研究を進めていただきました。その成果を、例年では合同研究集会の分科会にて発表していただいていたのですが、今年度についてはオンラインでの分科会までは開催準備ができませんでした。研究の概要について、このニュースに報告していただいておりますので、そちらをご覧くださいいただければと思います。

全体会のみ合同研究集会は、3月1日(月)15:30~16:45に、「学部教員と附属学校教員との連携・協働による実地教育と研究の成果と課題」をテーマに、2部構成で実施しました。

第1部「実地教育の成果と課題」では、まず山岸知幸教授の「センター研究プロジェクトを通じた実地教育科目の改善と推進」と松下幸司准教授の「2年次『教育実践プレ演習』における授業改善の試み」の発表があり、続けて大和田俊教諭(附属坂出中学校)と水口純教諭(附属高松小学校)、藤井朋子教諭(附属幼稚園)から教育実習を中心とした特徴的な取り組みについて発表していただきました。

第2部は、「学部教員と附属学校教員との連携・協働による研究の成果と課題」をテーマとしました。学部教員と附属学校教員が連携・協働して取り組んだ研究の成果に基づき、『算数授業 インクルーシブデザイン』(恵羅修吉・松島充著、明治図書、2021年3月)が出版されました。これを受けて、今後の連携・協働による研究のさらなる推進の契機とすることを主なねらいとして、お二人の著者に概要を発表していただき、鶴川護教諭(附属高松小学校)からコメントをいただきました。



発表者の1人 山岸教授



※中央の画像2枚は、オンライン配信された映像をキャプチャしたものです。

研究グループ報告

※大学教員は、研究代表者のみ記載。以下同じ。

参加型学習による教科横断的・総合的なカリキュラム開発研究 —SDGsの視点を踏まえて—

鈴木正行^{*}、附属高松中、附属坂出中

本研究では、社会科と英語科の教科横断的な単元開発を行い、両科の教員による協働授業を実施した。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、授業実践が年度を跨ぐこととなった。題材として、私たちの生活に欠かせない存在となっているパーム油に着目し、栽培地の開発による熱帯雨林の伐採と、そこに生息するオランウータンなどの野生動物の危機を扱った。「ボルネオ島の熱帯雨林に棲むオランウータンを救うために自分たちは何ができるか?」を学習課題とし、英文の選択肢によるダイヤモンドランキング法を用いて、グループで話し合う学習活動を行った。事後のアンケート調査では、多くの生徒が楽しく学べたと答えた一方で、深く考えて自分の意思をしっかりと相手に伝えるためには、社会科の授業なら日本語を使い、英語の授業なら英語を使う方がよいという意見も多く見られた。グローバル化への対応が迫られる教育現場において、学習者の視点から教科の在り方を考える上で重要な示唆を得る研究となった。



センター長あいさつ
令和3年度教職センター事業計画
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動
研究グループ報告

研究グループ報告

令和2年度 教育実践集中講座 実践報告
研究グループ報告

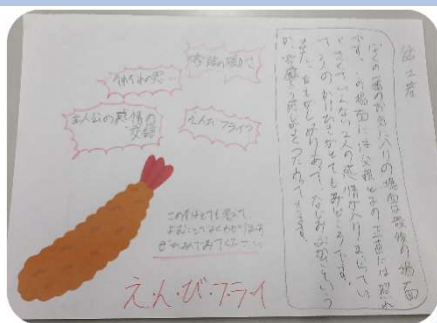
令和2年度 センター公開講演会 報告
令和2年度 国立大教育実践研究連センター協議会報告
(附属学校園 この1年2020)
(附属幼・附属幼高松園舎)

附属学校園 この1年2020
附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中

2 小学校・中学校における読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒に対する学習支援の方法についての研究 ー多面的な見方・考え方を育む学習課題の開発ー

佐藤明宏^{*}、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中、附属特別支援

国際化が進み、多文化共生の教育が進められている中で「多面的な見方・考え方を育む」ことは、各附属学校園で求められている重要課題である。そこで、私たちは国語科の授業の中でこそ、個性や能力の差や生活経験の差や読書経験の差を生かして、多面的な解釈が飛び交うライブ感のある彩り豊かな授業を展開したいと考えた。ただ、何でもありではなく、個性的な読みの交流で生まれた多様な解釈を正しい読みにつなげていく工夫も必要である。さらに我々が研究対象としている読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒は、どちらかといえば、見方・考え方が固定的で柔軟性に欠ける部分があり、そのことが読み書きの力を阻害している部分も多い。そこで、本年は研究テーマとして、「多面的な見方・考え方を育む学習課題の開発」を設定し、研究に取り組んだ。



3 「ものがたり」の学びの基礎としてのディスコース分析

松島 充^{*}、附属坂出中

本研究は、「ものがたり」研究を推進する上で基礎となるディスコース分析を中学3年「相似」の単元で行った。授業研究では、「体育館の床から天井までの高さはどのくらいだろうか」に関して探究を行った。探究の過程では、誤差の要因について、子どもたちが批判的思考をはたらかせて数学的思考を深めるとともに、どの測定方法の精度が高いかを論理的に対話できるような授業デザインを導入した。ディスコース分析は、最初に各グループでの発話記録をテキストマイニングを用いて数量化、グラフ化した。その結果、あらかじめ想定しておいた数学的思考の深まりのために必要な単語の発話数が多いグループとそうでないグループを特定して比較分析し、数学的思考の深まりのポイントとなった相互作用を特定した。そのポイントとなる相互作用の前後を重点的に、Sfard (2008) のコモグニション論を用いて質的に分析した。その結果、「ものがたり」の学びを深める授業デザインを再提示することができた。



4 子どもと保護者の声を聴く保育評価と園内研修モデルの開発

松井剛太^{*}、附属幼稚園高松園舎

昨年度に引き続き、日常の子どもの声を聴き、それを園内研修に還元する園内研修モデルの発展を検討した。昨年度同様、職員室に模造紙を貼って、子どもたちの印象的な声をその都度付箋で記していった。ただし、昨年度は子どもの声を聴いた場所を基盤にしていたところを変更し、保育者が自らその声がなぜ印象的だったのかを振り返り、「保育観」、「子どもとの関わり」、「環境」、「子ども理解」の4つに分類して示した。また、参加者として県、市の指導主事も加わり、地域の中で附属幼稚園の教育のあり方にどのような意味があるのかも含めて議論がなされた。

10月から2月まで定期的にカンファレンスを行い、その間に聴かれた子どもの声をもとに保育の見直しを実施した。今年度は職員が2名変わったこともあり、幼稚園での保育のあり方に関する本質的な議論がなされ、カンファレンスの場が幼稚園のあり方の確認や伝承になっていることなどが推察された。子どもの声を聴く保育評価は、目の前の子どもたちの今を大切にしながらも、施設としては先々のことを見通した理念形成にもつながっていることが示唆された。



5 「なりきり鑑賞」における探究と省察

吉川暢子^{*}、附属高松中、附属坂出中

本研究では、美術科における「鑑賞」と「表現」の一体化を目指した「なりきり鑑賞」の題材開発を行い、なりきることによって作品を見る視点を獲得することを目的としている。昨年度での実践において、生徒は絵画作品の服装や持ち物などをつくることに興味を持つ傾向にあった。そのため、本年度の実践では身近なものの中から道具や材料を使用して絵画作品になりきった参考作品

(#museumathome) を提示した。なりきり視点を4つ設定し、①身体の動き、②構図、③光(影)の効果を意識しながら制作(撮影)を行い、作品の④心情を意識し相互鑑賞を行った。これらの実践の成果として絵画作品になりきることによって「表現」と「鑑賞」を繰り返しながら、「構図すごい」「光をうまく表現している」などの作品を見る視点の獲得(鑑賞)や道具や材料を見つけ出す視点も獲得(表現)できたといえる。今度の課題として、時間数や撮影場所の問題や制約を踏まえ教材研究を行い、検討していく。



6 子どもの視点・声を引き出す幼児理解・保育評価

松本博雄^{*}、附属幼稚園、附属幼稚園高松園舎

附属幼稚園と高松園舎にて、書き言葉をはじめとする子どもの表現に焦点をあて、幼児期の発達にふさわしい形式で子どもの「声」を聴き取り、引き出すための手法を探ることを目的としたアクションリサーチに本年度も継続して取り組んだ。具体的には教育学部専門科目である保育内容の指導法(言葉)の内容と連動させ、日常の保育実践の中に埋め込むかたちで、幼稚園児と大学生との間での「手紙」のやりとりを展開するプロジェクトを試みた。それによって、幼児期の「書く／描く」表現のあり方とそれを支える条件について、自分の思いを言葉で表現する基盤の形成という観点から検討した。プロジェクトの結果、ふだんは手紙や文字に関心が薄かった対象児にも「書こうとする」姿勢が引き出されたと同時に、園での友だちや保育者との日常の遊びを土台に、書き表現へと巻き込まれた対象児が数多く見られた。加えて特に書き始めの段階において観察された「だいすき」などの定型表現が、個々の思いや考えを書き言葉で表現する入口として機能している可能性が示唆された。



令和3年度 教職センター事業計画
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動
研究グループ報告

7 知的障害特別支援学校算数・数学科における「図形概念の理解」に関する研究

恵羅修吉^{*}、附属特別支援

附属特別支援学校では、新学習指導要領に対応した教育課程について検討し、学校教育段階から将来を見据えた教育活動の充実を図るとともに、系統性をもった学習内容の構築をめざしている。算数・数学では、高等部卒業後の仕事や生活の場面で必要なスキルの中で特に在学中に育てたい力として「図形概念の理解」をとり挙げた。私たちは様々な形を分別し、その空間的関連性を理解・活用したりしながら日常生活を送っている。「図形概念の理解」は、知的障害児にとっても生活の質を向上させるうえで重要な発達課題である。本研究では、小学部、中学部、高等部それぞれの発達段階と個別理解に応じた、題材研究を行った。教科教育の視点から発達段階に応じた学習内容の効果を評価するとともに、子どもたちの図形概念の習得状況を客観的に把握する事前・事後評価を実施して指導効果について検討した。

写真は、高等部授業「平行な見えない線をイメージして整えよう」の一場面である。



研究グループ報告

8 「語ろうデー」の開催は園の保育者の行動変容につながるか

片岡元子^{*}、附属幼稚園

附属幼稚園では、2018年度より保育実践や保育討議を地域の保育施設に公開する「語ろうデー」を実施している。昨年度までの研究で、「語ろうデー」への参加によって自身の保育を振り返り、新たな実践課題を獲得し、園に戻った後の行動変容につながる場合があることを明らかにしてきた。今年度は、「語ろうデー」の開催が附属幼稚園の保育者の行動変容につながったのか聞き取り調査を行った。その結果、経験年数の少ない保育者は、開催園の一員として参画することに負担感を感じている一方で、経験年数が増え、地域に向けて発信するために自園の実践を振り返り言語化しようとすることや、園での立場や役割を果たしていくために自身の在り方について考えるようになることが見出された。また、研究テーマ「保育する」への取り組みとも関連しながら、それぞれの保育者や園の「保育する」を尊重していくことの重要性にも気づいていた。引き続き、「語ろうデー」の実施の在り方について検討していきたい。



令和2年度 教育実践集中講座 実践報告
研究グループ報告

9 小学校理科の新課程教科書の研究：小学校教員養成における課題の明確化

松本一範^{*}、附属高松小、附属高松中、附属坂出小、附属坂出中

本研究は、本年度から全面実施となった小学校新学習指導要領下の新しい小学校理科教科書の検討を通じて、学習指導要領改訂の意味と小学校教員養成における理科としての課題について考察している。理科領域では、物化生地4分野の専門教員と教科教育の教員の共同の指導による学部3年生向けの小中理科の単元案作りの授業(「理科授業研究Ⅱ」)があるが、その指導には教科専門教員による小中理科各単元の内容の詳しい把握が不可欠である。本研究はそのためにも直接役立つべきものとして企図され、各専門教員がそれぞれの分野の変更点を検討した。例えば、生物分野では「一様性と多様性」を気付かせる内容が3年で多く盛り込まれ、一様性を基にした演繹的思考が促されていること、天文分野では6年における太陽の扱いが大幅に減少していること、化学分野では6年の「水溶液の性質とはたらき」で鉄が溶けた水溶液から出てきた固体についての実験や両性金属の扱いがなくなっていることなどが報告された。

変更点①		結果(各分野の報告)			
旧 p.162		アルミニウム	アルミニウムは、水に溶けず、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。
	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄
	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄
	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄
新 p.186		アルミニウム	アルミニウムは、水に溶けず、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。
	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄
	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄
	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄	鉄は、水に溶け、空気中では、表面に酸化皮膜が形成される。	鉄

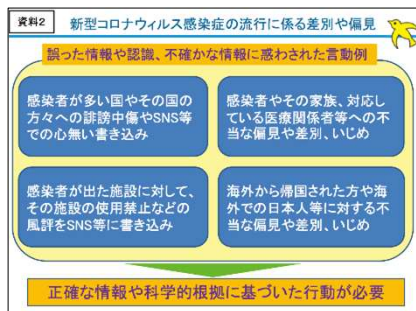
令和2年度 センター公開講演会 報告
令和2年度 国立大教育実践研究連センター協議会報告
附属学校園 この1年2020
(附属幼稚園・附属幼稚園高松園舎)

附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中

10 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を題材とした ヘルスリテラシーを育成するための教材作りに関する検討 ～中学生を対象として～

宮本賢作^{*}、附属高松中、附属坂出中

本研究では新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を題材とした保健授業を展開するための教材作りを行うため、附属高松中学校の増田教諭および附属坂出中学校の徳永教諭が本年度実施した「感染症の予防」の授業について分析するとともに、文部科学省が令和2年3月に新型コロナウイルス感染症の流行拡大を受けて公開した「改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引（追補版）・保健体育（保健分野）第3学年指導事例」についての分析を行った。いずれも感染症の予防の方法を主な授業のねらいに位置付けて実施し、ウィルスの起源、過去の感染症の大流行などの正確な知識を身につけるとともに、予防法に対する探究的思考の深まりや態度、そして行動変容を促すものであった。更には流行にかかる差別や偏見、正確な情報や科学的根拠に基づいた行動の必要性について展開することの重要性を示唆するものもあり、保健授業をヘルスリテラシーの育成と関連付けて実施することの有用性を示唆するものであった。



11 住生活領域と「消費生活と環境」領域を関連付けた小学校家庭科の授業開発 ～SDGs時代の家庭科～

妹尾理子^{*}、附属高松小

現在の家庭科では、よりよい生活に向けて実践的・体験的に学ぶと共に「持続可能な社会の構築」をめざす視点が重視されている。本研究では、住生活領域の学びを地球温暖化、プラスチック問題等の現代的課題と関連付け、感受を重視した授業を構想し実践した。題材名は「冬のあったかい生活」で、コロナ禍において換気が重視される中、環境配慮と心地よさを両立させる生活について考えた。まず家庭内の暖房器具の特徴と使用上の注意点を学び、暖かさを保つには空気の層をつくるのが重要であることを実験により理解し、カーテンの役割を考えた。続いて、「床材の選択」を課題とし、合板、無垢材、天然素材の敷物（畳ござと毛織物の2種）を用意し、実際に体感した上での温度測定、天然繊維と化学繊維の特徴の整理、製造過程における環境負荷の検討等をもとに、班内で意見交流を行った。研究発表会で授業を公開したところ、授業の流れと教材の両面について、現場の教員から高い評価を得ることができた。



12 地域安全マップを作成可能なアプリの改善と教育効果の検証

大久保智生^{*}、附属坂出小

これまで香川県警察と連携して、防犯ウォーキングアプリの開発を行ってきた。現在は、移動距離やカロリー計算も可能になり、危険箇所と安全箇所の点検数のランキング機能なども追加し、アプリの機能も充実してきている。今回は地域安全マップを作成可能なアプリの改善を行った結果、これまで以上に見やすく、操作しやすいデザインとなった。また、アプリ上で学習できるコンテンツも開発したため、これまで最低でも3時間かかっていた地域安全マップ作成活動が2時間程度で可能になった。コロナ禍で実施が危ぶまれていたが、香川大学防犯パトロール隊および香川県警と連携して、2021年3月に附属坂出小学校の4年生2クラスで実施することができた。活動の結果、子どもの防犯意識や防犯に関する能力が向上することが示された。

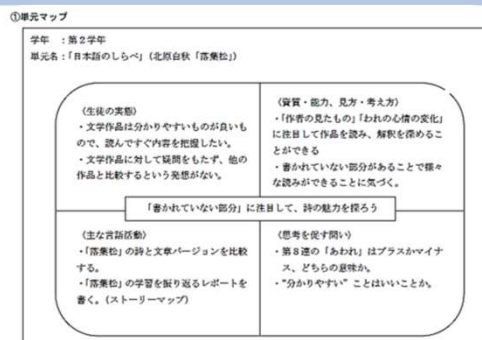


13 中学校国語科における思考ツールを活用した学びのデザインと振り返りの実践的研究

山本茂喜^{*}、附属高松中、附属坂出中

今年度は、昨年度に引き続き、思考ツールを活用した新しい評価法と授業デザインの開発をテーマに、特にストーリーマップを援用した国語科指導案作成と自己評価の方法について共同研究を行った。今回の実践研究では、ストーリーマップを用いて授業を「問題と解決」の枠組みによりデザイン化するとともに、学習者が学びを自己のストーリーとして物語る「物語り自己評価」の有効性を追究した。

これまで我々は『思考ツールで国語の「深い学び」』（山本茂喜編著・東洋館出版社）を初めとして三冊の本を上梓しているが、今回の共同研究をもとに新しく研究書を出版する計画を鋭意進めているところである。これまでのご支援に深く感謝するとともに、来年度以降もさらに共同研究を深化させていきたいと考えている。



令和2年度 教育実践集中講座 実践報告

先生になろう! ~自己の成長を教職に進む自信に~

荻田 泰世・葛西 秀樹・岡 静子

第一期(4~9月)

- [第1回] 6月20日(土)教育法規Ⅰ
「教員になる①」(荻田)
「教員になる②」(葛西)
- [第2回] 6月27日(土)教育法規Ⅱ
「教員になる③」(荻田)
「教員になる④」(葛西)
- [第3回] 7月6日(月)教育理解
「学校について理解しよう
~教職の魅力~」(葛西)
- [第4回] 7月6日(月)学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」(岡)

- [第5回] 7月13日(月)道徳教育
「道徳科の多様な授業づくり
~心を耕す道徳の授業」(葛西)
- [第6回] 7月13日(月)子ども理解
「場面指導」ロールプレイ(岡)
- [第7回] 7月20日(月)子ども理解
「場面指導」ロールプレイ(岡)
- [第8回] 7月29日(水)子ども理解
「附属学校参観の心構え」(荻田)

第二期(10~3月)

- [第1回] 10月30日(金)教育課題の探究
「いじめ問題の現状と課題」(葛西)
「教員としての倫理観」(岡)
- [第2回] 11月9日(月)教職理解
「学校について理解しよう④」(岡)
- [第3回] 11月9日(月)学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」(岡)
- [第4回] 11月9日(月)教育の最新情報
「教師に求められる力」(荻田)
- [第5回] 11月11日(水)教育実習事後指導
「教育実習を振り返って」
シンポジウム・助言(荻田・岡)
- [第6回] 11月16日(月)教職理解
「教職を知る②
~教職の魅力、私の経験から~」(葛西)
- [第7回] 11月19日(木)生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「小学校の事例を中心に」(葛西)
- [第8回] 11月26日(木)生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「小学校における生徒指導の実際」(荻田)

- [第9回] 11月30日(月)教育の最新情報
「教育課程と学校評価」(葛西)
- [第10回] 12月3日(木)理論と方法
「生徒指導対応」(岡)
- [第11回] 12月11日(金)
校種別による選択実務研修
「はばたけ若き力を生かして
~4月からの心がまえ~」
中学校(葛西)・小学校(岡)
- [第12回] 12月14日(月)教職理解
「授業について考える
よい授業とは・よい保育とは」(荻田)
- [第13回] 12月16日(水)人権教育
「学校教育における人権教育
小学校での取組事例に学ぶ」(岡)
- [第14回] 1月18日(月)道徳教育
ケーススタディ
「道徳科の多様な授業づくり
~心を耕す道徳の授業~」(葛西)
- [第15回] 2月1日(月)教育の最新情報
「学級で育つ子どもたちのために」(岡)

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休業が長引いただけでなく、感染予防のため、対面での講義も限られ、オンラインでの一方的な説明が多くなりました。そのような状況下でも、毎回熱心にメモを取ったり、うなずいたりしながら聴講してくださった受講生の真剣な姿に、私も緊張感をもって臨むことができたとともに、これまでの私自身の実践を振り返るよい機会になりました。講義中に「憧れの先生がいて、その先生の影響で自分も先生になろうと思った人は?」と問うと、多くの手が挙がりました。教員をめざす受講生が、自分のモデルとなる教師像をもち、そこに向かって頑張っている姿をととても頼もしく感じました。

現在、小学校でのプログラミング学習、教科外国語の導入、いじめや不登校への対応など、教育界は大きな変革期を迎えています。それ故に、これまで以上に一人ひとりの子どもと向き合い、子ども理解を深めることや学校という組織全体で対応することの大切さが求められています。このようなことから、教師という職業には様々な苦労や困難がありますが、毎日、純粋な心と豊かな発想力をもった子どもたちとともに過ごすことで、多くの発見と感動のある日々を過ごすことができるだけでなく、子どもたちの成長とともに自分自身も成長することのできる素晴らしい職業です。

教職の道を歩もうとしている受講生には、広い視野をもち「夢」を大切に、「笑顔」で前進していつくれることを願います。

着任のごあいさつ

令和3年4月より、当センターに関わり、新たに2名の方をお迎えすることになりました。

【教職支援グループ 着任のご挨拶】

本年4月より附属教職支援開発センター関係事務を担当させていただくことになりました 井上 早江子と申します。3月に定年退職し、第二の人生のスタートをここで迎えられることに不思議な縁を感じております。これまで培った知識を活かしながら、また、リフレッシュな気持ちで業務に取り組んでいきたいと思ひます。ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたひします。



【事務補佐員 着任のご挨拶】

今年4月から附属教職支援開発センター事務補佐員として着任いたしました 寺岡 久美子と申します。私自身の学生生活を振り返ると、大学時代が一番充実した日々を送ることができていたと感じています。香川大学のみなさんの学生生活が充実したものになるよう、少しでも力になりたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたひします。



令和3年度 教職センター事業計画
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動
研究グループ報告

研究グループ報告

令和2年度 教育実践集中講座 実践報告
研究グループ報告

令和2年度 センター公開講演会 報告
令和2年度 国立大教育実践研究開発センター協議会報告
(附属学校園この1年2020)
(附属幼・附属高松園舎)

附属学校園この1年2020
附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中

令和2年度 センター公開講演会 報告

「教科化に伴う香川県教育センターなどの取り組み」講師：県教育センター 芳我清加先生
「教科化に伴う授業力の向上について」講師：東京学芸大学教職大学院 粕谷恭子先生

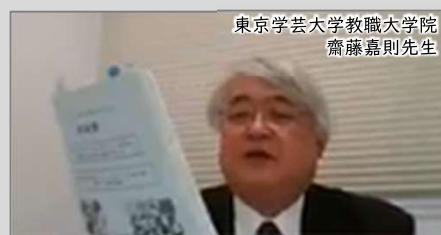
令和3年2月6日(土)、独立行政法人教職員支援機構の受託事業「独立行政法人教職員支援機構連携教職大学院を対象とする地域センター支援事業」として実施される英語ラボ研修会2020を、対面・オンラインハイブリッド形式の公開講演会(共催)として開催しました。

令和2年度の「英語ラボ」は、小学校英語が教科としてスタートした1年目を総括し、2年目以降を見据えて授業をどう向上するかを論ずる中で教育実践に資することを狙いとして実施されました。

まず東京学芸大学教職大学院教授の斎藤義則先生と香川県教育センター指導主事芳我清加先生より、『教科化に伴う香川県教育センターなどの取り組み』という表題でご講演を頂きました。香川県教育センターにおける初任者研修並びに専門研修の中での小学校英語授業実践のモデル提示や香川大学教育学部での小学校英語教育等の取り組み紹介に続き、現在小豆島町で小中高が組織的・計画的・継続的に連携し、「デスク上のカードをキャビネットに整理し」さらに「そこから瞬時に必要なものを取り出して使う」ことができるための、10年単位のCAN-DOリスト作成などの取り組みについて詳しく解説していただきました。

続いて、東京学芸大学教職大学院教授の粕谷恭子先生より『教科化に伴う授業力の向上について』という演題でご講義を頂きました。「意識改革の必要性」「言語活動を通して」「授業を見直す」「4技能の伸長」「音声の重要性」「英語に自信がないと思っている先生へ」という概要を基に、子どもたちが自分の中の「心・思い」を言語を通して伝える手段として英語を主体的に使うことを常に念頭に置くこと、小学校段階の4技能を「耳、口、目、えんぴつ」を位置付けて「音声→文字」「多量の理解可能なインプット→アウトプット」という順序を逆流させず追い越さない指導の重要性などを、豊富な実践例を交えてご紹介いただきました。

(文責：中住幸治/香川大学教育学部)



※画像は、当日の講演会において、オンライン配信された映像をキャプチャしたものです。

令和2年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

本年度のセンター協議会は、オンライン会議として2回開催されました。これまで通り会計や体制、会の方向性に係る「審議・報告」の後、「協議」及び各センターからの報告が行われました。本年度の「協議」の内容は、COVID-19下における各センターの取り組みが中心となりました。それぞれの会の「協議」内容を以下に示します。

<第97回・令和2年9月11日(金)13:00~17:00>

■COVID-19の教育実践への影響に関する情報交換会について(鷹岡亮氏・山口大学)

■センターの取り組み例

□「ZoomとMoodleを使ったオンライン授業『教育の方法と技術』の実践」(須曾野仁志氏・三重大学)

□「山口大学で実施した遠隔授業アンケートの結果及び遠隔授業で苦悩する学生の心理的背景」

(木谷秀勝氏・山口大学)

□「共感的理解を深めるWEBカウンセリング」(小林正幸氏・東京学芸大学)

<第98回・令和3年3月4日(木)13:00~17:00>

■「Covid-19と教育実践：第97回総会を振り返って」(鷹岡亮氏・山口大学)

■教育相談・教育臨床の視点：「コロナと闘う学校—子どもたちのこころの中に何が起きているのか?」

(小林正幸氏・東京学芸大学)

■教師教育・教育実習の視点(加藤隆弘氏・金沢大学)

■教育課程について(加藤直樹氏・東京学芸大学)

各センターからの報告では、各大学で進められているセンターの再編と大学における位置づけについての現状が多く報告されました。教職大学院との関係など、制度的な再編がより進みつつあることがわかりました。また、教育現場はもちろんのこと大学の教職課程でも求められてきている「ICT活用」に係る対応が、今後ますますセンター協議会に求められてくる大きな課題になることを感じました。

令和3年度も2回の協議会が予定されております。会の持ち方(オンライン等)については、状況をみながら判断されることとなります。

(文責：山岸知幸)

附属幼稚園

附属幼稚園 研究経過報告

研究主題 保育するⅢ ～子どもとつくる明日～

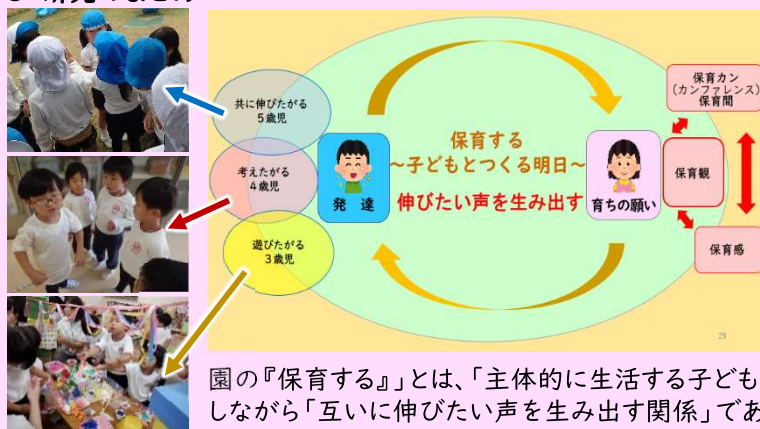
1 研究主題について

子どもたちが身の周りの人やもの・ことと多様に関わり、それらの関係性の中で自分の思いや考えを生き生きと表出する「主体的な子ども」と、それらの関係性を捉え援助について考える中で「自らも成長し向上し続ける保育者集団」の絡み合う生活そのものを『保育する』という動態で捉え、保育実践の質の向上を追究した。

2 研究の過程(子どもの声・自分の声を聴くことを土台に)

子どもの一挙手一投足すべてを声と捉え、これまでの過程を踏まえながら、一人一人の「～したい」「～なりたい」という育ちたい願いを見取り応えていくことを「子どもの声を聴く」とした。同時に、保育者が「自分の声を聴く」(子どもの姿から自らの保育を振り返り自らの声に耳を傾けること)を土台に、事例研究を中心として研究を進めた。

3 研究のまとめ



上で示した2つの声を大切にしている過程こそが成果そのものであり、保育者一人一人が子どもの声と自分の声に耳を傾け、自分なりに保育観を広げていくことができた。また、子ども主体の生活から見えた育ちを本園なりの発達観として見出すこともできた(左図)。また、その発達を支えているのは、子どもたちが保育者に声を聴き取られた実感を「伸びていく力」に変え、そんな自分を保育者と共有しようとする「保育者との応答」であった。これらの成果を踏まえ「本園の『保育する』とは、「主体的に生活する子ども」と「自ら成長し向上し続ける保育者」が応答しながら「互いに伸びたい声を生み出す関係」であると捉えることができた。

園の『保育する』とは、「主体的に生活する子ども」と「自ら成長し向上し続ける保育者」が応答しながら「互いに伸びたい声を生み出す関係」であると捉えることができた。

附属幼稚園 高松園舎

高松園舎 研究経過報告

研究テーマ 「ああしたい」「こうしたい」の実現に向けて～遊びこむ姿を支える保育の在り方～

1 研究主題について

昨年度、「遊びこむ姿」に至る過程には様々な体験や葛藤に関わり、それが子どもの学びに繋がることが見えてきた。今年度はどのような教師の援助や環境構成が「遊びこむ姿」を支えられるのかを探ることを研究の柱とした。

2 研究の内容

○事例検討と共同研究によるカンファレンス(子どもの声に耳を傾けて)

昨年度の成果として、子どもの声に耳を傾けた時、教師も葛藤を感じ、迷ったり心を揺らしたりすることの大切さを感じた。そこで、今年度は子どもの「ああしたいこうしたい」と教師の「こうなってほしい」とのずれに着目し、ずれを感じた事例について検討したり、大学との共同研として行っているカンファレンスをさらに充実させることで、日々の保育に生かすようにした。

○環境の見直し

臨時休園をきっかけに、再度園内の環境を見直し、着手できることから改善を試みた。その際、子どもの遊びを振り返り、動線や安全性などの観点から見直しを行ってきた。それにより、自分がしたいことを実現するために必要な物を子ども自身が選択決定しやすい環境となった。

3 研究の成果

子どもの思いと教師の願いのずれを感じた時こそ保育を振り返るチャンスと捉え、カンファレンスを通して自分とは異なる考え方や捉え方に気付くことができた。また、自分の保育観が広まり、深まることで子どもへの関わり方にも変容が見られた。今年度は感染予防対策のため20名限定の研究発表会を2回開催することになったが、少人数のため参加者全員が発言できて討議も深まり、多くの学びを得ることができた。



研究会|日目の様子

本校は、平成25年度より文部科学省研究開発学校、そして平成29年度より教育課程特例校の指定を受け、テーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。

新型コロナウイルス、環境汚染、高齢化社会、ネット犯罪など、様々な分野で前例のない変化に私たちは直面しています。そのため、これからの不透明な社会では、価値観の違い、年齢の違い、国の違いなどに関わらず、初めて会った人とも分かち合いながら、未知の問題を解決するために新しい知や価値を生み出すことが必要になると考えます。私たちは、どんな時代、場所、集団においても、夢や憧れをもち自律的に学び続ける力、ひと・もの・ことへ共感的・協同的に関わる力、問題を解決し知や価値を創造する力等を発揮しながら、仲間と共に最適解を探っていける子どもこそが、研究テーマに掲げる人間像であると考えています。この3つの力を本校は、3つの資質・能力として設定しています。

上記のような資質・能力を養うために、カリキュラムを「教科学習」と「創造活動」の2領域から構想しました。そして、2領域で資質・能力を養うために、子どもたちが主体的、共感・協同的、創造的に学ぶことができる授業の在り方を実践研究してきました。

初等教育研究発表会では、このようなカリキュラムに基づき、これからの社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を考え、目指す子ども像に向かう授業づくりについて提案しました。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、参会を県内の先生方に限定すると共に、録画視聴、別室でのサテライト参観、広い会場での距離をとった直接参観、県外へのオンデマンド配信という4つの参加方法を準備して、開催致しました。県内からは延べ600名ほどの先生方が参会され、活発な意見交流を行うことができました。教育界では、コロナ禍により、教員の資質・能力の向上に欠かすことのできない授業研究を行うことが難しい状況が続いており、大きな課題となっています。今回の研究会では、ポストコロナ時代における新たな授業研究の在り方を提案できたと考えています。

今後も、子ども主体の研究実践を基盤にしながら、新しいカリキュラムの創造に取り組んでまいります。



授業を別室へサテライト中継の様子

研究主題 互いに磨き合い、学び続ける子供の育成(3年次) — 個の発達に応じ、メタ認知を促す授業づくり —

1 研究会の概要

第102回教育研究発表会は、令和3年1月20日(水)、23日(土)、29日(金)の3日に分けて、オンライン研究会として開催いたしました。3日間で約650名の方に参加いただきました。20日と23日の2日間は、実践事例提案と意見交流を行い、29日には東京大学の中邑賢龍先生、香川県教育センターの白川章弘先生、香川大学の岡田涼先生をシンポジストとしてお招きし、本校の坂井聡校長をコーディネーターとしてシンポジウムを行いました。シンポジウムでは、授業で見られた「互いに磨き合い、学び続ける子供の姿」や自己肯定感とメタ認知との関係、今後の教育の在り方等について、シンポジストの先生方の専門性を生かした、活発な意見交換が行われました。

2 研究主題等について

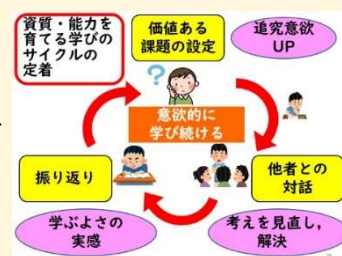
平成30年度に上記研究主題を設定し、学習意欲やメタ認知に関わる研究を3年間続けてきました。「互いに磨き合い、学び続ける子供」とは、「課題を解決するために、各教科の見方・考え方を働かせて自ら考え、他者の考えに耳を傾けながら追究し、見いだした次の課題についても考え続ける子供」です。授業ごとにその姿を具体的にイメージしながら、実践を積み重ねてきました。その育成に向けて、メタ認知を促す働きかけを行うことで、主体的に課題を設定し、協働しながら課題を解決していただくだけでなく、そのような学び方のよさを実感できるようにしています。

3 成果と今後の方向

参会者の方々より、「『研究理論提案』では、授業の『学習課題』に関わる場面でのメタ認知について、子供、教師の両者が、その重要性を共有できていることが理解できた」「子供の学習意欲や意識の流れを大切にする学習の重要性を改めて実感した」など、肯定的なご意見を多くいただくことができました。今後は、本研究の成果を生かしつつ、全ての子供がより一層意欲的に学び続けることができるよう、メタ認知以外の様々な能力にも目を向け、研究をさらに深めていきたいと考えています。



【提案の様子】



【目指す子どもの姿】

附属高松中学校

研究主題

精神的に自立した人間を育てるカリキュラム開発 —教科する教科学習と省察性を高める人間道徳の実践を通して—

本校の研究について

研究の
詳細は
こちら



研究の方針

全教育研究の実践を通して次の①と②で示した精神的に自立した人間の育成を目指す。

- ① 主体的かつ自律的に考え、判断し、行動すること、及び、多様性を認め尊重し、持続可能な社会の一員として生きることを、調和的に達成する人間
- ② 過去から連なる現在をよりよく生きること、及び、予測困難な未来においてよりよい社会を創造することを、調和的に達成する人間

本校では、第8期の研究テーマ「学校を問い直す」の基、令和2年度の研究を進めました。上記の研究主題を定め、右記の研究の方針を立て、よりよいカリキュラムの在り方を模索しました。令和2年度は文部科学省から教育課程特例校の指定を受け、新領域「人間道徳」を設けた教育課程で研究を進めています。また、教科する教科学習によって教養ある生徒の育成を目指しています。秋には5人の研究者を招いて研究授業を実施し、大所局所から指導を受けました。

令和3年6月に研究発表会を計画しています。コロナ禍での大会ですが、少しでも多くの方に本校の教育研究の成果をご覧いただきたく存じます。以下に概要をお知らせしますが、詳しくはHPや案内等でご確認ください。

期日 2021年6月10日(木)・11日(金)
会場 香川大学教育学部附属高松中学校
内容 公開授業、研究討議、講演

そしてそのような人間に備わっている教養を身に付け、省察性を高めるカリキュラムを開発する。

そのため教養(世界を見つめ世界に関心をもち世界に働きかけ、自らを高め続ける姿勢)を身に付ける教科学習を実践する。それは各教科ならではの面白さや魅力、その教科を学ぶ意義の実感につながる知のプロセスに参加する教科する教科学習である。

それと同時に省察性(多様な他者や社会との関係の中で、「なぜそうなのか」、「本当にこれでよいのか」、「何があるべき姿なのか」を考え、自己の生き方・在り方を問い直して調整していこうとするその人の態度や性質)を高める新領域「人間道徳」を設置し、実践する。



附属坂出中学校

本校の研究について

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び

—語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案(第一次終了)—

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を継続してきた。今年度6月の研究発表会(誌上発表)は、前回までの研究を継承しつつ、カリキュラム全体を通して「自己に引きつけた語り¹⁾」を生み出す実践を行っていくことで、生徒の学ぶことの意味や価値の実感につなげ、生涯にわたって学び続ける生徒を育成することを提案した。後期からは、研究発表会の成果と課題を踏まえ、「生徒の自己形成につながる『自己に引きつけた語り』をどのように生み出していくか」を大きなテーマとし、「自分自身や自分をとりまく世界の見え方、感じ方の変容」と「語り合い、探究する学びの過程」という視点を特に重視して、「ものがたりの授業²⁾」の定義をもとに実践に取り組んでいる。

また、H30年度より研究開発学校指定を受けた「共創型探究学習(CAN)」は4年次を迎え、「探探究課題の設定」に重点をおき、教師が適切にかかわることで、より深い探究になることをめざしています。昨年度から使用している「探究深化シート」と「ToDoリスト」も継続して活用し、さらに講座内容を新しくした「シャトル」とも連携することで、生徒にとっての真の探究となるように取り組んでいます。



【後期研究授業での様子】

1) 「語り」の中でも、特に出来事と自己との関連を見つめ、それを筋立てて、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。
2) 「ものがたり」の考え方を取り入れた授業のこと。他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、学ぶことの意味や価値を実感し、未来につながる自己のよりよい生き方を見いだしていく。

研究主題 「育てたい力」の育成をめざすカリキュラム・マネジメント
～小・中・高の学びをつなぐ学習内容の充実をめざして～

2018年度より、児童生徒一人一人の「育てたい力(=自立して生きる基盤となる力)」をはぐくむことを目的として、発達段階に応じた学習内容を検討した上で、小・中・高での学びに系統性をもたせ、教科の内容の充実を図る授業実践を行ってきました。3年目を迎えた今年度は、研究の最終年度にあたりましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響もあり、ICTの活用もテーマの一つとなりました。本校ではGIGAスクール構想の実現や多くの皆様のご助力により設備の整備が進んだほか、ICTワーキングチームを立ち上げ、教員相互や保護者研修の実施、授業でのICTの試行的な導入にも取り組みました。

1月30日(土)には、第20回教育研究発表会をWEB大会として実施し、全国から多くの皆様にご参加いただき、情報や意見交換の場となりました。特別支援学校では特に卒業後を見据えた日々の学習内容と質が問われます。今年度は本校の特性である12年間の学びの連続性を踏まえたカリキュラム・マネジメントの一例として、小・中・高等部ともに算数・数学科の図形領域の内容で授業実践を発表しました。児童生徒の実態把握の上に、「具体と抽象の往還」によって図形に対する理解を深め、個別最適化を図る実践例を示しました。指導した教科の内容が子どもたち一人一人の卒業後の生活に有効に機能するよう、今後も継続的な評価と改善を行いながら、他領域の実践に取り組んでまいります。



図1 身の回りの物の形を探している様子



図2 色板をケースに敷き詰めている様子



図3 並行を意識して椅子を並べている様子

教育実践総合研究(第44・45号)原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第44号は2021年11月30日(火)原稿受付締切、
第45号は2022年5月31日(火)原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

1(投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2(投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3(投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4(投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5(投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6(刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7(投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。

(1)採録 (2)条件つき採録 (3)返戻

8(校正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則 本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則 本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則 本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則 本要領は、平成27年4月1日から施行する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
(No. 9)

発行日 令和3年5月20日 代表者 松村 雅文

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町 1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

<https://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/>



センター長 あいさつ

関係各位におかれましては、お忙しい毎日をお過ごしのことと拝察いたします。日頃より本センターの事業にご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年からのコロナ禍の影響は少なからぬものがあります。香川大学でも、授業等の多くがオンラインへと移行し、演習・実習・実験などの一部も、形態の変更を余儀なくされた等、様々な影響を受けてきました。本稿執筆時点で、事態が改善する傾向はみられるものの、まだ予断を許さない状況が続いていると思われます。一日も早い収束を望んでおります。

さて、本センターでは、2019年4月から、①実地教育推進、②教職支援推進、③教員研修推進、④教育開発/ICT推進の4部門で事業を進めております。新設された③教員研修推進部門と、名称変更となった④教育開発/ICT推進部門については、それぞれの事業を進めつつも、コロナ禍の影響もあってまだ模索が続いている状況です。



一方、2022年度から始まる第4期中期目標・中期計画に向けて、学部内外でのセンターの役割についても再度検討が必要となっております。今後センターには何が必要とされているのか、教員養成や教員育成をも含んだ教育や研究及び事業は、どのように考えればよいのか等が問われており、我々が試される日々は続いております。今後とも附属教職支援開発センターに、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

附属教職支援開発センター長 松村雅文

令和3年度 附属教職支援開発センター 事業計画

1 実地教育推進部門（実地教育に関する管理及び運営）＜実地教育委員長（永尾）、センター＞

- (1) 「大学入門ゼミ」「教職概論」(1年次) <教員養成課程主任(片岡)、松下・清水・笹屋>
- (2) 「教育実践プレ演習」(2年次) <未来留担当(藤元)、松下>
- (3) 「教育実践演習」(事前事後指導)(3年次) <センター長、山岸・久米・豊島・清水>
- (4) 「教職実践演習」(4年次) <実地教育委員長(永尾)、山岸・久米・豊島・笹屋>

2 教職支援推進部門（教職支援に関する管理及び運営）＜学生支援専門委員長(笠)、センター＞

- (1) 教職志望学生への日常的支援活動
<学生支援専門委員長(笠)、宮前(義)・植田・山本(木)・久米・豊島・谷口・片岡・宮前(淳)>
・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教授対応
- (2) 教職志望学生及び現職教員への教育相談活動 <同上>
・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
- (3) 教育実践集中講座の開催 <松下、毛利・櫻井・(客員教授:小山・藤原・岡)>

3 教員研修推進部門（現職教員研修に関する管理及び運営）＜高度教職実践専攻長(武蔵)、センター＞

- (1) 現職教員への研修支援活動
<野崎NITS四国アライアンス香川大学センター長、センター長・山岸・久米・豊島・谷口・柳澤・関係職員>
・指導力向上のための公開講演会等の開催
・教職大学院現職教員研修への協力
・学内の現職教員研修各種プロジェクト(教員免許状更新講習を含む)への協力

4 教育開発/ICT推進部門（教育開発に関する管理及び運営）＜附属担当副学部長(高木)、センター＞

- (1) 教材・資料の収集・管理・活用支援 <松下・センター事務>
・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
- (2) ICT機器の活用支援 <附属担当副学部長(高木)、松下・清水・笹屋・関係職員・センター事務>
- (3) 研究活動の報告等 <センター長・松下・山岸・センター事務>
・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
- (4) 関係機関との連携 <附属担当副学部長(高木)、センター長・山岸・松下、教育学部総務係>
・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等

5 その他

- (1) 広報活動 <松下・センター事務>
・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
- (2) 学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導<山岸・松下>

研究主題 「育てたい力」の育成をめざすカリキュラム・マネジメント ～小・中・高のつながりを意識した学習内容の充実をめざして～

特別支援学校学習指導要領の中で、障害のある人のライフステージ全体を豊かなものとするために、学校教育段階から将来を見据えた教育活動の充実を図ることが示されています。そこで、本校の子どもたちに「育てたい力（＝自立して生きる基盤となる力）」の育成につながるカリキュラム・マネジメントを行うこととし、学習指導要領の改訂の方向性でもある「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の視点で、研究を進めています。「育てたい力」を育むために、それぞれの発達段階に応じた学習内容を検討するとともに、小・中・高の系統性をもたせ、それらの学びが卒業後の豊かな生活へとつながる授業改善、教育課程の検討をめざしています。

今年度は、小・中・高の学部を越えた縦割り班で授業検討や討議を行い、他学部の取組を知ったり、学びのつながりを意識して学習内容を見直す視点をもったりすることができました。そこでの意見も参考にしながら、学部の年間指導計画の見直しを行っています。

今年度見直した教育課程を来年度の実践の中で評価していくことや、何ができるようになったか、学習成果を的確に捉え、個別の共働支援計画の評価・改善と教育課程の改善をつなげていくことは、今後の課題として取り組んでいきたいと考えています。

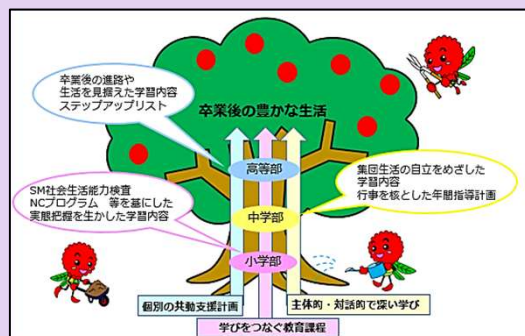


図1 本校の研究でめざすもの

平成30年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

第93回国立大学教育実践研究関連センター協議会は、平成30年9月27日（金）に宮城教育大学を会場として開催されました。開会では、東原会長と会場校である宮城教育大学 前田副学長様より挨拶がありました。

その後、「震災伝承と防災人材育成－教員養成に向けられた期待－」と題して、宮城教育大学 防災教育未来づくり総合研究センター 小田隆史先生よりご講演をいただきました。ご講演では、防災リテラシーを有する教員をいかに育てるのかについて、東日本大震災を教訓に進められている宮城教育大学の多様な取り組みが紹介されました。近年大きな災害に遭うことのない香川県の大学であっても、防災リテラシーを有する教員養成が喫緊の課題であることを痛感させられました。

昼食をはさみ午後からは、前回の議事録確認、各部門会議からの報告、会計に係る報告、2017年度事業の部門報告ならびに2018年度事業計画について報告がありました。その後13時50分より、各センターの報告と連絡がありました。各大学センターの役割や組織が多様化していることをうかがわせる情報共有・交流の場となりました。

閉会後に部門会議が開催されました。教育学・情報教育部門では、小学校におけるプログラミング教育の実施に向けた教員養成大学としての対応などについて、各大学の取り組みについて情報交換が行われました。（文責：松下幸司）

第94回国立大学教育実践研究関連センター協議会は、平成31年2月15日（金）に東京学芸大学を会場として開催された。開会では、東原会長の挨拶、中島東京学芸大学副学長の挨拶があった。議事・報告では、前回の議事録確認、各部門報告、会計報告があり、新年度からの役員体制について提案があった。議論では、とりわけ現在教職大学院をはじめとする各大学での様々な改組によるセンターの位置づけの曖昧さ（他の組織に再編、等）の中、本会議が今後どのような役割を担っていくのかが問われた。こうしたことも受け、その後の東原会長の講演では、センター協議会設立からの動向や歴史がレビューされ、その上で、近年のSociety 5.0をめぐる動向を踏まえつつ改革していくことが重要なのではとの認識が示された。そしてこの観点から、2019年度に議論していくことになった。これまでの3部門体制も見直し、2020年度より新しいセンター協議会として動きだしていくことになるとと思われる。

午後からは、各センターの動向について情報交流会が行われ、参加全センターからそれぞれの現在の状況、改組情報、センターが抱えている課題、今後の見通し等の報告があった。どの大学も教職大学院の拡充に伴う再編が行われ、人の動きや職務内容も大きく変わろうとしているようである。その中で香川大学は、教職支援や学部の実地教育に力を注いでおり、ここに他の大学とは異なる独自性を感じ取ることができた。今後も他大学との情報交流を密にとっていくことの重要性を感じた。なお、情報交流会に先立ち、急遽「センター紀要」の在り方について静岡大学より問題提起があり意見交換が行われた。実践研究とは何か、が問われているように思われた。

閉会後に部門会議が開催された。参加した教育実践・教師教育部門では、上述の情報交換会の内容をより深めるかたちで、各大学との情報交流を行った。（文責：山岸知幸）

寄贈図書(2018/04/21~2019/04/20)

教育実践総合センター紀要 第35号 2017 平成30年2月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センターレポート 第37号 平成29年12月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
群馬大学教育実践年報 第7号 2017年	群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター
立正大学 臨床心理学研究 第16号 2017年度	立正大学心理臨床センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 研究年報 Vol.17 2018.3	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 第18回シンポジウム記録集 これからの学校教育と教員養成カリキュラム 学びの原点に立ち返る —「理科」と「社会科」の間—	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
心理相談研究紀要 第16号 2017年度	神戸親和女子大学心理・教育相談室
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第27巻 2017	鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
岐阜大学教育学部 特別支援教育センター年報 第25号	岐阜大学教育学部 附属特別支援特別支援教育センター
鳥取大学教育研究論集 第8号 2018年	鳥取大学 教育支援・国際交流推進 教員養成センター
心理臨床事例研究 愛媛大学心理教育相談室紀要 第14号 2018年4月	愛媛大学教育学部 附属教育実践総合センター 心理教育相談室 愛媛大学大学院教育学研究科 学校臨床心理専攻 臨床心理学コース
愛媛大学教育実践総合センター 紀要 No.36 2018	愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター
教育方法学研究 日本教育方法学会紀要 第43巻 2017	日本教育方法学会
生徒指導上の諸課題の現状と文部科学省の施策について	文部科学省初等中等教育局児童生徒課
琉球大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第25号 2018	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
平成29年度 子ども理解と実践の指導力の向上を目指した「教育実践 ボランティア」事業に関する実践報告書 第22号 平成30年3月20日	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
学校教育実践学研究 第24巻 2018	広島大学大学院教育学研究科 附属教育実践総合センター
平成29年度広島大学教育学部フレンドシップ事業 ゆかいな土曜日 実施報告書 平成30年3月	広島大学教育学部 フレンドシップ事業運営委員会
ルーテル学院大学大学院 臨床心理相談センター紀要 2018 Vol.11	ルーテル学院大学大学院 臨床心理相談センター
札幌学院大学 心理臨床センター紀要 第18号 2018年7月	札幌学院大学心理臨床センター
教育実践研究 第44号 平成30年10月	金沢大学人間社会学域学校教育学類 附属教育実践支援センター
横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論集 第18号 2018年	国立大学法人 横浜国立大学
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 第13号 平成30年12月	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター
鳴門教育大学 学校教育研究紀要 No.33	鳴門教育大学 地域連携センター
花園大学 心理カウンセリングセンター研究紀要 【第13号】 2019	花園大学 心理カウンセリングセンター
平成30年度学位論文 地域学習教材としての「四国遍路」の現状と課題 —香川県の小・中学校を事例として—	香川大学大学院教育学研究科 川人 有史
研究紀要 第46号 平成31年	広島県立教育センター
心理相談研究紀要 第17号 2018年度	神戸親和女子大学心理・教育相談室
教員養成カリキュラム開発研究センター 研究年報 Vol.18 2019.3	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 第19回シンポジウム記録集 これか らの学校教育と教員養成カリキュラム 教員の「学び」と「育ち」を問い直す	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
山形大学 教職・教育実践研究 第14号 2019年3月	山形大学教職研究総合センター
群馬大学教育実践研究 第36号 2019年3月	群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター
中等教育研究紀要 第65号 2018	広島大学附属中・高等学校
中等教育研究開発室年報 第32号 2018年度	広島大学附属中・高等学校 中等教育研究開発室
教育実践総合センター紀要 第36号 2018 平成31年3月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センターレポート 第38号 平成30年12月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
長崎大学教育学部教育実践研究紀要 第18号 2019年3月	長崎大学教育学部
次世代教員養成センター研究紀要 第5号 2019.3	奈良教育大学 次世代教員養成センター
広島国際大学心理臨床センター紀要 第17号 2018	広島国際大学心理臨床センター
夢 平成30年度「ちゃぶ台方式」教職研修部事業報告書	山口大学教育学部

「特集」
2019年度教職センター事業計画
第19回学部・附属学校園
教員合同研究会を終えて

研究グループ報告 ①⑧

研究グループ報告 ⑨⑫

平成30年度 教育実践集中講座 報告
実地教育 この1年2018

平成30年度 公開講演会 報告
附属学校園 この1年2018
(附属幼・附属幼高松園舎)

附属学校園 この1年2018
(附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中)

平成30年度 センター協議会報告
寄贈図書
附属学校園 この1年2018
(附属特別支援)

教職支援開発センター活動報告(2018/10/01~2019/04/20)

<平成30年度>

10月16日(火) 第六回専任会議
 10月19日(金) 教育実践集中講座(第二期1回目)
 10月20日(土) 公開講演会
 10月24日(水) 教育実践プレ演習第四回全体授業
 11月13日(火) 第七回専任会議
 11月19日(月) 教育実践集中講座(第二期2回目)
 教育実践集中講座(第二期3回目)
 11月21日(水) 教育実践演習第七回全体指導
 11月22日(木) 教育実践集中講座(第二期4回目)
 11月28日(水) 教育実践演習第八回全体指導
 教育実践集中講座(第二期5回目)
 11月30日(金) 教育実践集中講座(第二期6回目)
 12月3日(月) 教育実践集中講座(第二期7回目)
 12月6日(木) 第三回編集会議
 教育実践集中講座(第二期8回目)
 12月10日(月) 教育実践集中講座(第二期9回目)
 12月11日(火) 第八回専任会議
 12月12日(水) 教育実践集中講座(第二期10回目)
 12月21日(金) 第四回編集会議

1月15日(火) 第九回専任会議
 第五回編集会議
 教育実践集中講座(第二期11回目)
 1月21日(月) 教育実践集中講座(第二期12回目)
 教育実践集中講座(第二期13回目)
 1月23日(水) 第六回編集会議
 1月28日(月) 教育実践集中講座(第二期14回目)
 2月13日(水) 第一回教職支援推進部門会議
 2月15日(金) 第94回国立大学教育実践研究関連
 センター協議会
 2月19日(火) 第十回専任会議
 2月20日(水) 第一回教育開発推進部門会議
 2月21日(木) 第一回実地教育推進部門会議
 3月4日(月) 第19回学部・附属学校園教員合同研究集会
 3月5日(火) 第十一回専任会議
 3月7日(木) 第二回運営委員会

<平成31年度>

4月10日(水) 特別支援教育実践演習全体指導
 4月11日(木) 教育実践演習 第一回全体指導
 4月16日(火) 第一回専任会議
 4月18日(木) 教育実践演習 第二回全体指導

教育実践総合研究(第40・41号)原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第40号は**2019年11月29日(金)**原稿受付締切、第41号は**2020年5月29日(金)**原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

1 (投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2 (投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3 (投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4 (投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5 (投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6 (刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7 (投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。

査読者については、会議において決定する。

(1) 採録

(2) 条件つき採録

(3) 返戻

8 (校正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則

本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則

本要領は、平成27年4月1日から施行する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
(No. 7)

発行日 令和元年6月10日

代表者 松村 雅文

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

<http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/>



編集の関係上、本号(第7号)が皆様のお手元に届くまで時間を要しましたこと、お詫び申し上げます。